

— 追 悼 —

辻 光之助先生の思い出

安 田 春 雄

去る3月27日早朝、辻先生が急逝されたとの知らせを聞き東京天文台近くのお宅に伺い、永遠の眠りにつかれた先生の安らかなお顔を拝見していると天文台で先生の指導を受けて過ごした十数年の思い出が走馬灯の様に頭の中を駆けめぐり、古き良き時代のロマンに満ちた天文学者の世代が終わった事を痛感しました。

先生は東京天文台で終始一貫子午儀観測に従事された。昭和8年から昭和11年にかけて新京（中国の東北地方の現在の長春）・秋田・北海道の北見で野外経緯度観測に従事され、日本と中国大陸の間の天文経緯度の不連続性から後年の日本の経緯度原点のずれの研究の端緒となる観測成果を上げられましたし、昭和7年には月の赤径観測を始められ日本での月の子午線観測の端緒も作られました。先生の業績として特に顕著なものは黄道帯星表・天頂帯星表・赤道帯星表を出版されたことです。これらは日本で初めて作られた本格的な観測星表で辻の星表三部作として世界的に有名です。黄道帯星表は昭和12年に観測を始められたものであり、天頂帯星表は第二次世界大戦での日本の敗戦の年で混乱の真ただ中にあった昭和20年に早くも観測を始められたものです。深刻な食料不足の四年間に観測を完成されたことは当時を知る者にとってはただただ敬服する他は無い。赤道帯星表は昭和25年に観測を始められ、東京大学を定年で退職される前年まで観測されたものです。先生の星表作製に対する執念の凄さを感じたのは戦時中の灯火管制下でも観測できるように先生が作られた地下壕の残骸を目にした時でした。

先生は昭和23年東京天文台に講座制が始めて採用された時、今は亡き宮地政司先生とともに始めて東京天文台教授になられました。その時ちょうど東大の天文学科を卒業した私が助手として先生の講座に配属されました。しかし私はゴーチェ子午環での観測に従事する事になっていたため直接御一緒に観測することはありませんでしたが、同じ部屋に机を並べていて色々の教えを受けたり迷惑を掛けたりしたものです。

先生や私などが属する研究単位は子午線部という名称が当時既に付けられて居ましたが、天文台の人は皆“辻研”の愛称で呼んでいました。東京天文台で研究室と呼ばれている部門が当時他には無かったところを見ると先生の独創的な天文観測と研究への熱意やユニークな人柄に対して特別の敬意が払われていたのではないかと思います。



写真：七夕の頃辻研の建物前で辻先生（後列左から二人目）を囲んで、中野三郎先生や故萩原雄祐先生（後列左から一人目と三人目）の姿も見える。

私が天文台に勤め始めた時は天頂星を観測されていた時で、夏などパンツとランニングシャツ一枚で蚊取り線香をたきながら観測されている姿を深夜よく見たものです。その翌朝には先生の官舎の垣根にG.U.と書かれた旗が必ずはためいていたものです。この旗は前夜に観測が行われた記しで、出勤してきた辻研のお嬢さんが竹竿にくくり付けたその旗を肩にして観測室から数巻の観測テープ（当時の子午儀観測では視野内の一定の場所を星が通過した事を示すマークと秒信号マークを記録した長尺のテープを使っていた）を取りに行く姿をよく目にしました。G.U.とは“世界に冠たるゲッチンゲン（Göttingen Über Alles）”の意味で、19世紀前半の最大の数学者でゲッチンゲン天文台長として天文学の発展に尽くしたC.F. ガウスの世界に観測中は没入されているが今はゲーゲーといびきをかいていると宣言した先生のしゃれではなかったらうか。

先生は話し好きで、冬などは辻研の建物の中央に置かれたストーブを取り囲み先生の辛らつだがユーモアに満ちたお話を聞くのが楽しみでした。夏の暑い或る日アイスキャンデー売りの呼び声につられ部屋のお嬢さんとこそこそ相談していると、“天文家はちんどん屋に惑わされてはいけません”との先生の声が飛んできた思い出もありました。これは先生の口ぐせで、天文観測中は世間の雑音を一切シャットアウトしなくては良い観測はできないという以外に、うわべだけ華やかそうに見える他人の研究に惑わされることなく地道に自分の研究に専心しなくてはいけない事を戦後派の若い我々に戒められたのだと思います。私を始め当時の天文関係者に深い感銘を与えられた先生の安らかな御永眠を心よりお祈りいたします。